

## 令和4年度岐阜県美術館協議会 議事要旨

1 日 時：令和5年3月20日（月） 16：00～17：10

2 場 所：岐阜県美術館 特別応接室

3 出席者：【委員】

村瀬会長、矢島委員、有賀委員、河西委員、熊崎委員、林委員、杉山委員、安田委員  
（欠席：猫田委員、鈴木委員、地守委員、所委員、福井委員、篠田委員、矢沢委員）

【県】

日比野館長、田中副館長、正村副館長、日比野課長、青山課長、  
廣江係長、福井係長（以上、美術館）  
蒲係長、松久主査（以上、文化伝承課）

4 議 題：令和4年度の美術館事業について  
令和5年度の美術館事業について

5 議事要旨：

（矢島委員） 令和4年度に岐阜新聞社と岐阜県美術館で企画して催した「前田青邨展」は、新型コロナウイルス感染症が落ち着きつつある中で、非常に良い作品を紹介していただき、美術館で芸術と触れ合う目的が達したのではないかと思う。

県民の皆様が本物を観て感動し、更には、ふれあうことによって見識が深まるということで、今後も良い企画をお願いしたい。

（林委員） 文学との交響、響きあいという大変重要な作品を岐阜県美術館は所蔵されている。「名品尽くし！」展は回顧展ではなく、ルドンと岐阜県ゆかりの作家の響き合いというような、岐阜県美術館しかできない企画であることが伝わってきた。

歴史的な作品と同時に、現代作家の活動についても幅広く力を入れていることや、美術館が持っている力を遺憾なく発揮し、出前講座やWebの充実、グループ活動の展開など、充実した活動を行っていることを感じた。

令和6年度の「清流の国ぎふ」文化祭2024は、準備が大変と思うが圧巻で成功裏になると思う。岐阜県美術館を全国にアピールしていただけると信じている。

また、美術の分野でも岐阜ゆかりの作家が充実していることの広報発信に力を入れて欲しい。

(有賀委員) 以前、鳥取県でアンディ・ウォーホルの作品購入について話題になった際、ある評論家が現代美術には見方があるが日本では教えていないと話しており、作品の見方は大切であると思っている。

令和5年度の教育普及事業の中で、美術鑑賞のガイダンス、展覧会の解説とあるが、これは個別のものに対してなのか、現代美術の見方についても教えているのか。

また、基本理念に「美と会話し」を入れた意図は何か。

(日比野館長) 基本理念は「美と対話する」を「美と会話し、美を楽しむ」とした。

昔の美術教育や美術鑑賞では、美術史を学んだうえで美を鑑賞し、美術館の中では会話をすることなく静かに観ることを学んだが、最近の美の親しみ方は、それぞれの見方を尊重し合おうと言われている。多様性とか社会的包摂というように、10人いたら10人の見方があるのがアートで、どれが正解かではなく、それぞれの価値を認め合うのがアートの特性である。

岐阜県美術館でも認め合うアートの見方を推進しようということで「美と会話し、美を楽しむ」とした。

鑑賞も対話型鑑賞ということで、いわゆる会話をしながら作品を観ていただくこともしている。一般の県民の方に美術館の新しい親しみ方を知ってもらうため、アートコミュニケーター「～ながラー」がファシリテーターとなり、会話をしながらアートを観て、それぞれのイメージする力を喚起するというアートの楽しみ方を実践している。

(村瀬会長) 美術館で現代アートの見方を教えてもらう機会はあるのか。

(日比野館長) アートツアーなどは、美術史のレクチャーというより、美を楽しむところでの対話型鑑賞となっており、講座的な「現代美術とは何か」といったレクチャーはしていない。

ご意見をいただいたので、今後考えていきたい。

(杉山委員) 展示作品を鑑賞させていただいたが、作品の説明だけではなく作品をどのようにして観やすくするか、照明や湿度、セキュリティ要素等の説明もあり非常に分かりやすかった。このような話は普段聞くことが出来ないため、このような機会があると良いと思う。

絵をどうやって観たらいいかわからないため、解説などを聞いたうえで絵を観る機会があると、見方が変わり面白いのではないかと思う。

令和5年度に「わかやまけん展」が開催されるが、このような企画は、美術館に普段足を運んだことが無い方も行ってみたい気持ちになり、幅広い世代の方が観に来るのではないかと思う。

令和6年度に「清流の国ぎふ総文2024」が開催され、美術館は美術工芸部門の展示があり全国から人が集まるため、ご協力をお願いしたい。

(河西委員) 「塔本シスコ展」「前田青邨展」は見応えがあり「名品尽くし！」展ではルドンや山本芳翠も楽しめる展覧会であった。AiMやIAMASの展示もあり、令和4年度はバランスが良い企画であった。

令和5年度は「走泥社」で立体作品であり、興味がある人は少ないかもしれないが今後も続けてもらいたい。

美術は正解か不正解ではなく、上手い下手ではなく、自分の気持ちを大切にし、これを伸ばしていくものである。岐阜県美術館はここをしっかりと取り組まれ、有難いと感じている。

学生の卒業制作展で一般展示室(県民ギャラリー)を使用している。壁面は明るい壁面以外は少し暗くなるため、スポットライトを設置して欲しい。

また、展示台も老朽化しているため、更新して欲しい。

(田中副館長) 設置には予算が必要ですが、皆さんのご要望を受け予算要求をして、改善を図っていきたいと思う。

(正村副館長) 展示台は「ぎふ美術展」の開催時に新しくしたり、表装を変えるなど協議して作ってもらっているが、1年間使用すると傷みが出てきてしまう。

(安田委員) リニューアル後に岐阜県美術館が変わったというイメージを持っている。アートツアーやワークショップ、出前講座等で開けた美術館になった印象である。

アートコミュニケーター「～ながラー」の事業を広く広報すると県民が訪れやすい美術館になるのではないかと思う。

ワークショップは多く開催して欲しい。ワークショップ体験後に展覧会を観ると、体験しないで観るのでは全く違うと思う。

(熊崎委員) 「前田青邨展」は、非常に良かった。新聞紙面での作品解説も非常に良く、勉強になった。新聞を読んでから展覧会を見ると、違った見方をすることが出来た。また企画をして欲しい。

「福祉とアート」のつながりについて、新しい岐阜県美術館の切り口として、今後どのようにしたいと考えているのか。

芸術・文化は心の支えとなる重要な部分と思っているため、バックアップするためのシルバー向けの実技講座、鑑賞会等があっても良いのではと思っている。

(日比野館長) 「福祉×芸術」は、7年前に東京藝大で始めたプログラム。

認知症の人が美術館に通うことによって認知症のスピードが緩和されたデータがあり、定量化して実証しようという試みが海外で先行して行われている。その中で、社会活動に参加することによって、様々な高齢化に伴う閉鎖的なものが緩和されていき、社会と接することが重要である「社会的処方」という言葉がある。そこから発展した「文化的処方」という言葉を、岐阜大学医学部と東京藝大で研究を深めていこうとすることが始まる。その実践のフィールドの一つとして国民文化祭を考えている。高齢化社会になっていく中で、文化がどのように機能していくのか、きちんと数値化する。文化に投資することによって、これだけの社会的課題解決になり、これだけの経済効果があることをしっかり研究していく。

岐阜県美術館では、アートコミュニケーター事業でも高齢者に対しての美を楽しむアートツアーとかを取り入れる。単なるイベントではなく、アンケートを取り、データを集めていきたいと思うが、個人情報のためハードルがある。しかし、このようなことをしっかりやっていきたいと考えている。

この「文化的処方」は始まったばかりだが、これから色々やっていきたいと考えている。

(村瀬会長) 入館者の割合について、例えば「県民」「ビジター」等のデータが取れるのか。

(正村副館長) 現在も企画展ではアンケートを取り活用を図っている。例えば「前田青邨展」の半数以上は県外来館者、「塔本シスコ展」は初めてご来館されたお客様が多かった。現代美術展では若い方が圧倒的に多い。

また、先日の「アートまるケット」では体験型も含まれ、無料ということもあり、高齢の方から若いファミリーまで幅広くご来館された。

年間を通じて展覧会のバランスが取れているので、年代的にも幅広いお客様がいらっしゃっていると思う。

(村瀬会長) 例えば、シニアの方が県内に宿泊される翌日の行程に、美術館や博物館も候補に挙がると思う。企画展があれば情報を事前に発信していくと効果があると思う。

現在、非常に良い形で運営されていると思う。更にデータをもっと活用していくと良いと思う。

以 上